慶長九年九月和漢千句　翻刻と解題

楊　昆鵬
中村健史

近世初期の文芸と学問を牽引し、堂上歌壇の中心となった後陽成天皇の文事については、これまで多くの研究がある。そのうち和漢聯句に言及するものとしては、小高敏郎『近世初期文壇の研究』織豊期第一章（明治書院、一九六四年）や深沢眞二『「和漢」の世界　――和漢聯句の基礎的研究――』第Ⅰ部第三章（清文堂、二〇一〇年）があり、また本稿の著者である楊も「京都大学平松文庫蔵『和漢々和』翻刻と解題」（本誌第二一～二二号）においてその生涯の和漢聯句活動を概観した。しかし、作品そのものの翻刻・紹介については、いまだかならずしも充分とは言いがたいのが現状である。

たとえば、後陽成天皇は生涯のうち四度にわたって和漢千句を興行している。

①天正十九年（一五九一）四月二十一日～二十三日
〔所蔵〕国立国会図書館『連歌合集』二十七（お九二・二一二）

②文禄二年（一五九三）四月二十日～二十二日
〔所蔵〕曼殊院（五十二）、第四：広島大学福井文庫（D一六七五）・松宇文庫、第六：国立国会図書館『連歌合集』二十三（お九二一二二）・京都大学附属図書館平松文庫（モ一ウ八）

③慶長九年（一六〇四）九月三日～五日
本稿にて紹介。

④元和元年（一六一五）三月六日～八日
作品未見。『中院通村日記』『泰重卿記』等に記録が見えるのみ。

右のうち、翻刻は①（『笘町後期和漢聯句作品集成』、臨川書店、二〇一〇年）と②の一部分（第六、楊前掲稿（上）所収）に備わるのみである。

本稿は、このような状況に鑑み、③慶長九年九月和漢千句を取りあげて翻刻し、近世初頭の和漢聯句を代表する資料として紹介するものである。四度に及ぶ千句興行は、和漢聯句の隆盛をもたらした空前絶後の偉業であり、その内容は連歌・俳諧史の上からも高い価値を有する。本稿が今後の研究の足掛かりとなれば幸いである。

なお、解題は一節を楊、二節を中村が、翻刻は第六までを中村、第七以降を楊が担当した。

一

当該和漢千句が張行された慶長九年は、後陽成天皇三十四歳、即位して十八年目にあたる。天皇はこれまでに二度の和漢千句（①②）を興行しており、本作の連衆（後述）のうち、照高院門跡道澄、左大臣近衛信尹、有節瑞保はこれに参加していた。また、中院通勝はすでに天正十九年、英甫永雄と和漢千句を両吟しており、連衆の多くに和漢千句張行の経験があった。このことは、本作の完成度を高める上で、大きな意味を持っていたと思われる。

特に注意されるのは、本作の中心人物とでも言うべき、後陽成天皇、近衛信尹、道澄の三人が、慶長七～八年ごろ意欲的に和漢聯句を張行している点である。

まず、『時慶卿記』慶長七年十一月二十四日条に次の記事が見える。

天晴、（中略）禁中ヘ被召テ参上。倭漢俄ニ在之。冲長老（梅印元冲）伺候也。無文台也。執筆ハ四辻（季継）・猪熊（教利）両人也。中院（通勝）・鷲尾（隆尚）・予（西洞院時慶）・烏弁頭（烏丸光広）、山科前中納言（言経）ハ日中ニ退出也、六条（有広）、以上十人也。夜半ニ満、内々番所ニテ午刻食、夜モ粥食在之。

記主西洞院時慶が参内したところ、「倭漢俄ニ在之」、急遽和漢聯句を作ることになったという。文禄二年（一五九三）和漢千句（②）以来、禁裏では天皇主催の和漢会が開かれるようになったが、ときにはこのような臨時の和漢聯句が試みられることもあったらしい。

一方で近衛信尹も、和漢聯句に対して後陽成天皇同様の熱意を示し、この前後、しばしば自邸で和漢会を催していた。例えば『慶長日件録』慶長八年八月二十三日条に、

晴。於陽明（信尹）和漢之会御興行。予執筆可伺候由内々被仰、仍早々令伺候。漢人数、相国寺保長老（有節瑞保）・南禅寺三長老（玄圃霊三）・冲長老（梅印元冲）・伝西堂（以心崇伝）・東福寺藤長老（集雲守藤）等也。和人数、陽明・照高院殿（直澄）・松梅院時能等也。秉燭満百。各退出後、予・保長老残居、有御雑談。夜半後帰蓬篳。

とある。連衆のうち、道澄、有節瑞保、梅印元冲、以心崇伝・集雲守藤、そして記主舟橋秀賢（執筆）は本作と重複する。

右の記事に名前の挙がる「照高院殿」こと道澄も、当時の文芸活動の中心的な存在の一人であった。『時慶卿記』慶長七年十月十七日条に、

照高院殿連歌興行出座、妙門（妙法院常胤）・聖門（聖護院興意）・陽明（近衛信尹）・勧宰相（勧修寺光豊）・昌叱・同琢（昌琢）・玄仍・玄仲、以上十人也。

と見えるように、連歌会を頻繁に主催しており、そこには里村家の連歌師たちも出入りしていたらしい。一方、同年八月二十九日条の記事には禅僧との雅交も書き留められている。

照高院殿御誘引ニテ南禅ノ聴松院へ越、振舞丁寧義、大酒也。漢和一折在之、第三予（西洞院時慶）申候。上句院主三長老（玄圃霊三）、入韻白后（照高院）、四句目冲長老（梅印元冲）、五西堂（梅心正五）・伝西堂（以心崇伝）等也。

道澄は時慶を連れて南禅寺に赴き、「大酒」ののち、寺僧たちと和漢を楽しんだ。禁裏や左大臣邸とは異なった気楽な雰囲気が想像される。

このように、天皇はもとより、近衛信尹や道澄もまたみずから和漢会を主催し、五山の僧衆や地下の連歌師と盛んに交流していたのである。文禄二年千句（②）及び本作に執筆として参加した舟橋秀賢も、自宅で和漢会を開くなど、連衆たちは日ごろから、それぞれの交流圏において和漢の鍛錬を重ねていた。

慶長九年に入って、後陽成天皇は一月二十七日に「御聯句有之。執筆言緒也。十二句有之」と聯句を作り（言経卿記）、三月十九日から二十一日にかけて千句連歌を興行した（御湯殿上日記・時慶卿記）。また四月三日には和漢聯句の四吟を行っている（慶長日件録）。同月七日の条には「（秀賢）被召御前、和漢懐紙処々削改畢」と天皇が数箇所にわたって懐紙を添削したという記述が見られ、作品の完成度への強い意志がうかがえる。その後、五月末から六月上旬ごろまで天皇は一時体調不良となり（言経卿記）、しばらく文事の記録は見られない。

天皇の健康回復にともない、閏八月下旬、本作の張行が決定し、同月から九月はじめにかけて周到な準備が行われた。このことについては、前掲深沢氏著に詳細な解説があるので、以下ではその大略を記すに留めたい。

八月二十二日、九月上旬に和漢千句を開催することが決定。舟橋秀賢が中心となって、参加者への連絡など手配が行われる。二十六日、禁中で和漢三百韻が執り行われた。千句張行に向けて、予行演習を兼ねた催しであった。九月一日、各自発句を提出。二日夜には僧衆が集う。張行当日の三日間は未明から深夜まで連歌会が続けられ、千句満了後に五十句の追加も詠まれた。翌六日には差合いを修正して一座はようやく解散。七日、執筆を勤めた秀賢が天皇の指示を受けて懐紙に添削加筆した。

二

翻刻の底本としたのは、京都大学附属図書館谷村文庫所蔵（請求記号四一四／ワ／二猪）本である。横本一冊四十丁帙入。縦一三・三cm×横一九・八cm。本文料紙は楮紙。丁子色紙表紙（縹色文様入り）の左上に金泥下絵題簽を貼り、『和漢漢和千句』と記す。奥書等はなし。書写者、書写時期は不明。単純な誤写のほか、和句の押韻字を平仮名で記すなど、本文には問題が多い。全丁の画像がインターネット上で公開されている（京都大学電子図書館貴重資料画像）。

諸本には、曼殊院蔵本、京都女子大学吉沢文庫蔵本（第七（1～13、20句）・第十（1～10、16～17句）のみ）、岩国徴古館蔵『和漢一会記』本（第三のみ）がある。このうち特に注目されるのは、曼殊院本が追加を収めることで、千句のみを記す底本と比べて、より原態に近い良質の本文を持っている可能性が高いが、今回は調査の対象としなかった。

なお、『慶長日件録』慶長三年九月六日条には、追加の漢和

聯句（全五十句）が第三まで抜書きされている。

1　霜　松　秋　表（ノホカノ）　物　　秀賢
2　軒端の風のやゝ寒き音　　隆尚
3　明ぼのゝ枕おどろく雁鳴て　　実顕

発句・脇句は、千句で執筆をつとめた舟橋秀賢と鷲尾隆尚が担当している。第三の「実顕」は阿野実顕。『曼殊院目録』『連歌総目録』などによれば、四句目以降の作者は季継朝臣（四辻季継）、文地丸、松寿丸、菊丸、冬隆（五辻冬隆）。句数各一とあるので、曼殊院本では表八句のみが記されるのであろう。

以下、連衆について略述する。

御製　後陽成天皇。元亀二年（一五七一）生、元和三年（一六一七）崩。第一〇七代天皇。在位、天正十四年（一五八六）～慶長十六年（一六一一）。名、和仁。のち周仁（かたひと）。陽光院誠仁親王（正親町天皇皇子）の第一皇子。母は新上東門院藤原晴子（勧修寺晴右女）。天正十四年、父誠仁親王薨去のため、代わって正親町天皇の皇儲となり、親王宣下、践祚。慶長十六年、皇太子政仁親王（後水尾天皇）に譲位。以後、院政を布く。和歌・連歌を好んで『百人一首抄』『詠歌之大概抄』『伊勢物語愚案抄』などの注釈を著したほか、講釈も行い、朝廷の文運興隆につとめた。『日本書紀神代巻』『論語』『孟子』などの古典を版行せしめたことでも有名（慶長勅版）。慶長前後、禁中において和漢聯句を数多く張行している。

照高院准后　照高院門跡道澄（しょうこういんどうちょう）。天文十三年（一五四四）生、慶長十三年（一六〇八）薨。一字名、白・聖。浄満寺と号す。近衛稙家の子。叔父道増に従って得度し、聖護院門跡、園城寺長吏、大僧正、准三宮。和歌、連歌に巧みで、禁中や豊臣家の連歌会にしばしば一座した。また飛鳥井雅庸に近衛流の古今伝授を行っている。

一乗院准后　一乗院門跡尊勢（そんせい）（近衛信尹兄、道澄甥）。永禄六年（一五六三）生、元和二年（一六一六）薨。法諱は尊政とも。一字名、楊。大往院と号す。近衛前久の子。大僧正、興福寺別当、准三宮。禁中の和歌、連歌会にも多く一座した。

左大臣　左大臣近衛信尹（このえのぶただ）。永禄八年（一五六五）生、慶長十九年（一六一四）薨。本姓、藤原。諱ははじめ信基、ついで信輔、のち信尹と改める。一字名、杉。三藐院（さんみゃくいん）と号す。近衛前久の子。天正五年、従三位。同十三年、左大臣。豊臣秀次の関白任官により、同二十年、左大臣を辞し出奔。のちに許されて慶長六年、左大臣還任。同十年、関白、准三宮。和歌、連歌、茶湯などを能くしたほか、ことにその書は三藐院流と称し、寛政三筆にも数えられる。近世初期の代表的文化人として有名。

入道前侍従中納言　中院通勝（なかのいんみちかつ）（法名、素然）。弘治二年（一五五六）生、慶長十五年（一六一〇）薨。本姓、源。一字名、菊。也足軒と号す。内大臣中院通為の子。母は右大臣三条西公条女。天正三年、参議。同七年、権中納言兼侍従に昇るも、翌年、正親町天皇の勅勘を受けて出奔。丹後の細川幽斎のもとに身を寄せる。同十四年、出家。慶長四年、許されて出仕。はじめ伯父三条西実枝に和歌を学び、のち幽斎に古今伝授を受け、帰京後は京都歌壇に重きを成した。家集に『中院通勝集』『源氏物語』の注釈書『岷江入楚』を著したことでも知られる。

飛鳥井宰相　参議飛鳥井雅庸。永禄十二年（一五六九）生、元和元年（一六一五）薨。本姓、藤原。諱ははじめ雅枝、ついで雅継、のちに雅庸と改める。参議飛鳥井雅敦の子。慶長二年、従三位。同八年、参議。同十八年、従二位。元和元年、権大納言。和歌・連歌を能くしたほか、家伝の蹴鞠を再興したことでも知られる。

有節　臨済僧・有節瑞保（相国寺慈照院住）。天文十七年（一五四八）生、寛永十年（一六三三）遷化。法諱は周保とも。東湖、生闇と号す。俗姓、市村。祐谷瑞延の法を嗣ぎ、相国寺九二世。慶長十二年、相国寺鹿苑院に入り、僧録となる。豊臣秀次の命によって『謡抄』が編纂された際には、その責任者となった。八条宮智仁親王（後陽成天皇皇弟）の師。

周洪　臨済僧・英岳景洪（南禅寺正因庵住）。生年未詳、寛永五年（一六二八）遷化。英叔周洪とも。蕙畝景叢の法を嗣ぎ、元和七年、南禅寺二七二世、塔頭正因庵住持。後陽成天皇の命により、以心崇伝らとともに『翰林五鳳集』を編纂した。

崇伝　臨済僧・以心崇伝（南禅寺牧護庵住）。永禄十二年（一五六九）生、寛永十年（一六三三）遷化。一色秀勝の子。南禅寺玄圃霊三のもとで出家し、靖叔徳林の法を嗣ぐ。慶長十年、建長寺、ついで南禅寺二七〇世となり、金地院に住した。のち西笑承兌の推挙によって徳川家康に出仕。外交、寺社行政などに辣腕を振るった。慶長十五年、駿府金地院、元和四年、江戸金地院を開く。遷化後、円照本光国師号を勅賜された。

梅印　臨済僧・梅印元冲（南禅寺語心院住）。生年未詳、慶長十年（一六〇五）遷化。三淵晴員の子。兄に細川幽斎、玉浦紹琮。梅谷元保の法を嗣ぎ、慶長二年、南禅寺二六八世。

集雲　臨済僧・集雲守藤（東福寺不二庵住）。天正十一年（一五八三）生、元和七年（一六二一）遷化。江湖散人、湖山と号す。はじめ比叡山に入ったが、のち東福寺の桂庵守広のもとで得度し、その法を嗣ぐ。慶長二年、東福寺二二三世。後陽成天皇と雅交を結び、しばしば禁中の聯句、和漢聯句に一座した。

正五　臨済僧・梅心正悟（南禅寺帰雲院住）。舟橋秀賢の日記『慶長日件録』当日条には「南禅寺帰雲院正五」と見える。生年未詳、慶長十八年（一六一三）遷化。華渓正稷の法を嗣ぎ、慶長十五年、南禅寺二七一世。

秀賢（執筆）　舟橋秀賢。天正三年（一五七五）生、慶長十九年（一六一四）卒。本姓、清原。大蔵卿清原国賢の子。慶長六年、家名を舟橋に改める。同七年、明経博士。同九年、式部少輔。同十八年、従四位上。後陽成天皇、後水尾天皇の侍読を勤め、徳川家康とも交流があった。

隆尚（執筆）　鷲尾隆尚（四辻季満）。永禄九年（一五六六）生、慶長十三年（一六〇八）薨。本姓、藤原。四辻公遠の子。はじめ四辻家を相続するが、のちに鷲尾隆康の養嗣子となって、名を鷲尾隆尚と改めた。天正十七、年参議。同十九年勅勘によって出奔するも、慶長六年、許されて参議還任。

なお、翻刻の方針は原則として『室町後期和漢聯句作品集成』（臨川書店、二〇一〇年）に従い、漢和聯句において和句の韻字を仮名で書いている場合には、適宜（　）内に注記した。また第三、第七、第十については、京都女子大学本、岩国徴古館本と対校を行い、その結果を末尾に示した。

《一》

慶長九年九月三日

第一

和漢聯句

1 ほにはいつ出ぞそらや荻の声　左大臣
2 綴珠翻露叢　梅印
3 蛩啼残月落　集雲
4 鶴入半天狲　有節
5 見る〳〵もすさきかくろふ汐満て　照高院
6 松のあらしの音のはげしさ　崇伝
7 暁鐘寒夢脆　一乗院
8 さそひさそはれ行たびの道　入道前侍従
9 里はたゞ爰にかしこに野をかけて　飛鳥井
10 はなち飼置駒いばふ声　周洪
11 暖新生緑草　正五
12 日永弾糸桐　隆尚
13 交為酔霞絃　左大臣
14 行もかへるもせきを中宿　梅印
15 喚睡鶏催曙　集雲
16 告帰燕過空　有節
17 葉疎霜後柳　照高院
18 軒ばの月もさむき秋風　崇伝
19 わかれてはひとりのねやの手枕に　一乗院
20 楽只約情濃　入道前侍従
21 花にこそおなじ心の友ならめ
22 すみかになるゝ鳥のさへずり
23 のどかなる籬の山の朝附日　飛鳥井
24 彩霞錦蜀中　正五
25 青春無老色　周洪
26 金卯得孤忠　梅印
27 かぎりあれば年古郷に又住て　左大臣
28 相逢盟克終　有節
29 妾希牛与女　集雲
30 月こそかたみ其さゝめごと　照高院
31 うきはたゞ露も情の泪にて
32 何をたのみに送る浅茅生
33 惑糸蛛自伝（綽カ）　一乗院
34 風にまかする蝶のあはれさ　崇伝
35 しづけさは霞むのみなる砌にて　左大臣
36 絮飛与雪同　入道前侍従
37 鶯のつばさや露にぬれけらし　集雲
38 早起好開櫳　一乗院
39 湊より友なひいづる舟の上　崇伝
40 波にあらしぞ吹すさびぬる　照高院
41 傍隈鳧就睡　有節
42 いはほづたひやかよひたへけん　飛鳥井
43 梯は半朽つゝかたぶきて　左大臣
44 松の梢に雲のかゝれる　入道前侍従
45 林茂塔纔寸　正五
46 晴清月正空　梅印
47 露深征袖湿　周洪
48 常に露ふる谷のした道　左大臣

49 有花雖爾屋　集雲
50 栽杏識番風　有節
51 戯蝶舞衫乱　崇伝
52 春のおまへに人つどふ比　一乗院
53 もよふしもちかづく南まつりにて　左大臣
54 今こそならせ春日のゝ道　照高院
55 咲比はをしか朝だつ小萩原
56 秋新糰秬豊　集雲
57 月明私照外　正五
58 蛍はきりに飛きえて行　飛鳥井
59 学廃檠如土　梅印
60 神伝筆吐虹　周洪
61 うつし絵はいきほひことによしありて　照高院
62 玉のうてなはむかしおぼゆる
63 世堯年舜日　有節
64 西風もたゞ時をたがへぬ　入道前侍従
65 いつしかに冬たちけりな雲の空　飛鳥井
66 靄積月蔵躬　崇伝
67 声一砧何在　集雲
68 けさ初かりの遠かたの里　左大臣
69 白鳥の鳥羽田の面は色づきて
70 山間(はか)きり間の伏見江のなみ　照高院
71 ほのかにも水はみどりに明はなれ　一乗院
72 回棹沂流嗣　有節
73 軽跡顧吾葉　梅印
74 満頭感老蓬　正五

75 おとそふる程をや思ひわかざらん　入道前侍従
76 旅行禿杖忽　周洪
77 ちりぬやととめ入花は岨伝ひ　照高院
78 霞をながす末の瀧川
79 稲淵の汀をけぶる春の雨　左大臣
80 携友浴沂童　集雲
81 与潔可人竹　有節
82 かくれ家をしもしむるかしこさ　一乗院
83 賭詩棋闘道　崇伝
84 開席酒治聾　梅印
85 暮日(くるか)をやあるじまうけにおしむらん(本ノ通)　飛鳥井
86 期月望山東　周洪
87 雲霧はしぐれし跡も棚引て　照高院
88 入日のまのかねは冷し　正五
89 岩阿数鴉立　左大臣
90 そりし高根はいづこなるらん　一乗院
91 空はたゞかきくもりつゝふる雪に　入道前侍従
92 からん舎りもしらぬ中道　左大臣
93 音にのみ聞(きこ)たしふるの都にて
94 ふるきやしろは杉の木がくれ　周洪
95 上階苔称意　集雲
96 終夜笛廛夢　照高院
97 誰にかもたのめてかよふ袖ならし　一乗院
98 けはひあやしくたゝずめるくれ　有節
99 花下簇紅騎　正五
100 梅辺掛玉弓

御製　十句　梅印　七
照高院准后　十　集雲　九
一乗院准后　九　正五　十
左大臣　十一　周洪　七
入道前侍従中納言　七
飛鳥井宰相　六　崇伝　七
有節　九　隆尚　一

《二》

慶長九年九月三日

第二

漢和聯句

1 転玉虫鳴砌　有節
2 釣簾のひまもる月は半天　左大臣
3 桐のはのもろき朽ばに風ふれて　照高院
4 ひやゝかになる雨禅なり　梅印
5 暮山雲霧靆　集雲
6 澗戸水潺湲　正五
7 鳥噪難安枕　入道前侍従
8 旅行友はいづれ先つ　周洪
9 微杖奈村遠　崇伝
10 攤書惜晷遷　飛鳥井
11 よむ歌にいにしへ人のしのばれて　一乗院
12 ねざめもふかき露のさむ(笹カ)しろ　秀賢
13 添思隻床月　有節
14 悲商沉水煙　身にしめてした待けはひつゝみかね　左大臣
15
16 ひとり開て戸ざか(かゝ)しには縁　照高院
17 夜る聞し嵐をみするけさの雪　梅印
18 松秀露峰顛　集雲
19 騒客被花挑　正五
20 隠生貢茗煎　入道前侍従
21 長閑かもか(にカ)たるやまどの几　周洪
22 画閣佳景連　崇伝
23 載湘軽艇重　飛鳥井
24 浪間にくるゝ月をあはれむ(憐カ)　一乗院
25 風はたる(わカ)尾花が末を分出て　有節
26 庵に鹿のなれし小山田　照高院
27 掃跡人帰尽　梅印
28 神がき淋しのこる白ゆふ(木綿カ)　集雲
29 法音杉隠説　左大臣
30 阿娜柳佳眠　入道前侍従
31 うぐひすやくれてやどりをさだむらん　正五
32 かすめる野べの袖の行かひ(往還カ)　崇伝
33 履跡摘鬚蘚　周洪
34 盆中称意蓮　有節
35 避塵開関谷　飛鳥井
36 歴世制齢籤　一乗院
37 はじめしぞあやしきは只薬なれ　集雲
38 ひめをく家の道や伝ふる　梅印
39 魯壁論蔵顕
40 広寒鏡欠円

41 木がらしに雲もかたよる嶺はれて　左大臣
42 松にしぐれしをとは焉ぞ　有節
43 源深流万尺　崇伝
44 旅逆路無辺　照高院
45 度〳〵になづめる駒ややすぶらん　正五
46 騰茂草芊々　左大臣
47 ちる花の跡はきよめぬ庭の面　入道前侍従
48 春さへ人のまれに向(問カ)屋前　一乗院
49 もろ共にめぐる霞は名残あれや　周洪
50 并遊約益堅　崇伝
51 歓衾鴛綉就
52 あだのかたみに涙涓るゝ
53 虞塚草愁種
54 あれ行あともいかに昔一年(一衍カ)　集雲
55 立かへる身を浦島が住侘て　一乗院
56 つなぎやかへん浪のふなばた(舷カ)　入道前侍従
57 潮激没砂背　左大臣
58 窓閑驚雨拳　梅印
59 をとするやあまた落ばの板　び(さし脱カ)　周洪
60 山のしづくに月ぞかゝれる(駈カ)
61 来也随陽雁　照高院
62 飛鶯翥霧鸛(ウカカ)　正五
63 分入しかたのゝはらのあさまだき　有節
64 淀の川せにさしとむるふね(船カ)　左大臣
65 五月雨に真こももみえず浪越て　飛鳥井
66 かぜたづねてぞあやをば(ゆ脱カ)牽　一乗院
67 離騒端午屈　左大臣
68 得誉孝門騫　有節
69 夢脆単衣蝶　崇伝
70 春過ぬとや啼杜鵑　照高院
71 月も猶有明がたはおぼろにて　正五
72 花にかりねの枕駢　左大臣
73 写紙情弥薄　入道前侍従
74 酌醋寿耐延　一乗院
75 影ひろく成てさかひ(カ)やしるからん　周洪
76 趙使璧瑕全　崇伝
77 ついにたゞ本意をとへるやはかりごと
78 民逢聖道平
79 年登耘鼓聒　集雲
80 秋至素紈捐　一乗院
81 夜永さはとはぬをかこつ閨の戸に　入道前侍従
82 月にむかひ(ヘカ)ばうさはすくなし(鮮カ)　左大臣
83 唐土におもひいづるや三笠山　梅印
84 法の師いかに分つ員〳〵　周洪
85 いろ成し袖もいつしか墨衣
86 甘閑遠市鄽　照高院
87 善隣青顧竹　正五
88 いく朝かほる冬は蔫める　有節
89 髣梢霜染作　左大臣
90 世をたすけんと出し賢さ　飛鳥井
91 さりはつる仏のおしへ尋てよ　一乗院
92 入灯春色専　左大臣

93 釣ぶねはくるゝ霞を分まよひ　左大臣
94 蘆は若ばとなる湊川　崇伝
95 映 浪 花 傍 柳　照高院
96 つゞく麓の里の玄けさ　有節
97 路 危 驢 渋 々　集雲
98 雲 画 兎 娟 々　正五
99 砧 充 林 移 楚　一乗院
100 秋更けぬれば住ゐ悛らむ

御製　十句　梅印　七
照高院准后　九　集雲　八
一乗院准后　九　正五　九
左大臣　十一　周洪　七
入道前侍従中納言　七　有節　九
飛鳥井宰相　五　崇伝　八
秀賢　一

《三》

慶長九年九月三日

第三

和漢聯句

1 中絶し錦は花の野分哉（形見カ）　飛鳥井
2 声 幽 何 処 蟇　正五
3 秋の霜枕にさむ夢覚て（志脱カ）　入道前侍従
4 月 侵 残 夜 床　梅印
5 初音今おもひもあへず時鳥　照高院
6 まだきにくれて雨かすむ空　一乗院
7 火 耕 山 隴 近　集雲
8 淑 気 暁 風 颺　有節
9 氷とく浪にも春をさそひきて　左大臣
10 臨 流 梅 影 芳　周洪
11 耳 濡 湖 雪 後　崇伝
12 あたりに馴て鶴羽ぶく声
13 雁あさる刈田の面の末ひろみ　隆尚
14 里はふし見の霧はるゝくれ　飛鳥井
15 鐘 後 少 焉 月　正五
16 まだ夜ふかくも別にし袖　入道前侍従
17 寸 胸 愁 累 百　梅印
18 我ものおもひはすれ（わカ）やはする　照高院
19 ちかひ置中は命をかぎりにて　一乗院
20 花 晩 幾 悲 傷　集雲
21 寒 剰 檐 禽 蟄　有節
22 けさまだあらき春の山風　左大臣
23 午 静 僧 眠 熟　周洪
24 路 遥 客 歩 忙　崇伝
25 空もやゝやすの河原はくれかゝり
26 雲 横 渡 半 蔵　正五
27 梯や俄にもふる雨ならし　飛鳥井
28 小 窓 風 送 涼　梅印
29 日晩のほのかなりしも声添て　入道前侍従
30 霧たちつゞくかげの木ぶかさ　一乗院
31 真木の葉は露の雫の絶〳〵に

32 澗底月蒼々　有節
33 柴の庵は汲あかつきにすむ（心カ）　左大臣
34 さらにひとりの床のつれづ〳〵　
35 凭几消塵事　集雲
36 吟詩成晩望　周洪
37 箋空鴉点墨　崇伝
38 江の北南雪はきへけり　照高院
39 いろはかつ（わカ）草木ながらの梅咲て（ふカ）
40 左暦待韶陽　
41 灯のきゆる扉はあくるよに　集雲
42 雁帰天一方　一乗院
43 暖和風習々　周洪
44 つぼみはまれになれる花の枝　有節
45 回首春成昨　左大臣
46 調音宮雑商　
47 星のあふ夜半の手向の更〳〵て（増カ）　正五
48 晴乍月憎光　梅印
49 雲にしも吹とほりたる秋の風　照高院
50 色にもみぢの散て行かた　崇伝
51 林雨迷棲鳥　入道前侍従
52 沙汀宿睡鴛　飛鳥井
53 浪平浜寂寞　集雲
54 くるればあまのかへる家〳〵　梅印
55 棹に簑かけほす程も只しばし　有節
56 絶間を照すくもり日のかげ　入道前侍従
57 富士の根やかつ〴〵消し雪ならん　左大臣
58 のどかに送る田子のうら風　飛鳥井
59 霞際月懸鏡　照高院
60 いづこみやことかへり見る空　周洪
61 津の国の難波のこともしのぶ世に　照高院
62 跫稀径就荒　
63 隠扉苔鎖断　正五
64 禁殿笋班行　崇伝
65 文智錦心李　梅印
66 余妍玉骨楊　有節
67 先の世をちぎりゆかしく思ひやり　集雲
68 生出たる姿あやしき　一乗院
69 秋つすのはじめと聞はあはぢしま　入道前侍従
70 もろこしやかふ（けカ）立春霞　左大臣
71 番風花有信　
72 宴席杏無量　正五
73 踏舞太平象　崇伝
74 御はしのもとに立出る袖　梅印
75 照紅鐘亦色　照高院
76 寺のいらかは月をへだつる　周洪
77 村煙霏霧結　左大臣
78 舟すさましくかへる江の水　集雲
79 しほ風に与謝の吹居の波をあらみ　一乗院
80 鳴行こへもいく友千鳥　
81 かり衣すそのゝ雉子ふみたてゝ　飛鳥井
82 暮天雪似狂　左大臣
83 あす見んと契りし花に吹あらし　有節
　　照高院

84 乱 糸 楊 短 気　正五
85 渉 霞 鶯 履 湿　崇伝
86 庭もまがきもふかき朝露
87 草やたゞ路もわかれぬ色ならし
88 えらびいらんの野辺のせ(虫カ)のね　入道前侍従
89 晩 歩 月 従 引　一乗院
90 秋 来 霧 瑞 祥　集雲
91 恩(本ノ迪) 兼 夢 沢 孰　周洪
92 慮 酌 箬 村 忘　梅印
93 一ふしにうたひそゆるもすゞろにて　有節
94 波 閑 楽 棹 郎　一乗院
95 釣たるゝ末は蘆辺の峰かくれ　集雲
96 うき藻もよるはかきつめてたく
97 ぬぎすへ(てカ)し衣のかほりを名残にて　左大臣
98 艶 簡 幾 文 章　照高院
99 盟 只 約 膠 漆　崇伝
100 宗 宜 整 紀 綱　有節
　　梅印

御製　十句　集雲　九
　　正五　七
照高院准后　九　周洪　七
一乗院准后　九　崇伝　八
左大臣　九　隆尚　一
入道前侍従中納言　七
飛鳥井宰相　六　梅印

《四》

慶長九年九月四日

第四

和漢聯句

1 年も経ぬいかにめでなば秋の月　集雲
2 菊 浮 累 寿 盃　一乗院
3 打かざす袖に紅葉のいろ添て　周洪
4 縦 横 路 去 来　有節
5 暮 江 舟 競 渡　梅印
6 村 校 硯 生 埃　照高院
7 初雪や窓をひらけばつもるらん　左大臣
8 竹の戦ぎぞけさはしづまる　飛鳥井
9 噪ぎつるねぐらの鳥の鳴出て　入道前侍従
10 外面にちかきのべの一かた　正五
11 緩 歩 逐 晴 杖　崇伝
12 戴 帰 禦 雨 ・　秀賢
13 山 昏 樵 袖 閑
14 鐘なる里の道のはるけさ　集雲
15 某 林 煙 曳 々　一乗院
16 あぐる流は竹の末〳〵(めカ)　周洪
17 挙 扇 漁 盈 握　有節
18 試 文 朝 択 才　梅印
19 争 先 容 諫 履　照高院
20 つかふる道に誠をぞおもふ　左大臣
21 花ぶさをあかつき月に手向かへ　飛鳥井
22 かゝげそひたる春のともし火

23 のどけさや猶殊更の雨の内　入道前侍従
24 慰意燕吟催　正五
25 糸幾委庭柳　崇伝
26 氈其舗路苔（は脱カ）　集雲
27 岩がきの雫も末ながれ出て
28 続筧断渓隈　周洪
29 春ちかき賤が山田をかへしそめ　一乗院
30 避寒酌緑醅　梅印
31 同袍交不浅　有節
32 やまとにむかひかへる唐人　左大臣
33 舟は只よせくる浪に程をへて　照高院
34 いく日かあらき沖つ白波
35 月に猶武庫の山風吹おくり　飛鳥井
36 晴ても末やのこる夕ぎり　入道前侍従
37 遠望泯字雁　正五
38 劣気怕鞭駘　崇伝
39 老愧難馳志　集雲
40 車をかへる世のつかひ人　一乗院
41 あらそふもゑゝるゝ（がカ）ほどの心にて
42 立すがりたる市のしづけさ
43 爰かしこ杖を袂のやすらひに　左大臣
44 風寒白雪堆　有節
45 平沙双玉鷺　梅印
46 初汐みつるなみのうろくず　飛鳥井
47 霧散漁歌近　周洪
48 月佳騒会陪　集雲
49 毎春花有約　正五
50 園になれくるうぐひすの声　左大臣
51 雪消の日（霽カ）のあたゝかに日のさして
52 快晴山昼開　周洪
53 入盆湘寸許　有節
54 操艇・難哉　梅印
55 左右手風葦　集雲
56 かたえやぶれし垣ほゆふ人　左大臣
57 袖つどふ物見の場のきよめして　照高院
58 うつす宮ゐにはふるしめ縄　飛鳥井
59 村やたゞ田づらもひかりそへぬらん　入道前侍従
60 乗興月徘徊（本ノ通）　正五
61 浪かくる舟は川辺の秋涼し　一乗院
62 風のまに〳〵ちる柳かげ
63 機外花摘錦　崇伝
64 爰にかしこにかすみ汲友　照高院
65 のりものゝ小馬も春の遊びにて　左大臣
66 ひかりうつろふ野は杳なり　一乗院
67 ふり通る雲は高根の一時雨
68 風川（下上）あらき清たきのなみ　入道前侍従
69 岸下舟漂泊　有節
70 窓前灯燼煨　崇伝
71 精勤儒読月　正五
72 只つれ〴〵と秋の日くらし　左大臣
73 海山のながめかくろふ霧こめて　照高院
74 掀蓬歴島廻　集雲

75 倦飛垂翼鴨　周洪
76 労聴撹眠雷　有節
77 雨雲のおほふ軒ばはのこるよに　一乗院
78 竹裏認香梅　梅印
79 呼友鶯頻至　集雲
80 将胥蝶亦猜　五
81 何繙胸宇語　有節
82 くづるゝ壁ぞ古しへのやど
83 緑茂閉門草
84 露いかばかりかゝる蓬生
85 月にさへとはれぬ夜半のかさなりて　梅印
86 抱独厭虫哀　一乗院
87 けさまでも枕のゆめはむすびかね　入道前侍従
88 百年一霎纔　集雲
89 衰顔非故我　飛鳥井
90 かへるもたびにつかれひとしき　崇伝
91 ならべつゝ引とゞめてはかふ馬草　周洪
92 波激水声・　照高院
93 川淀も雨に早せと成けらし　左大臣
94 驪(歌力)にももれてはしる若鮎　有節
95 三春童拾石　有節
96 ながきひねもすあかぬ乱碁
97 をのゝ柄も花のかべにや朽なまし　一乗院
98 仙遊紅杏莱　照高院
99 咫千飛夢軾　集雲
100 以四羽成崔　正五
崇伝

御製　十句　周洪　七
崇伝　七
照高院准后　九　梅印　七
一乗院准后　九　集雲　十
左大臣　十　正五　八
入道前侍従中納言　六　秀賢　一
飛鳥井宰相　六
有節　十

《五》

慶長九年九月四日

第五

漢和聯句

1 霧間山秘画　梅印
2 もみぢのかげもくるゝ松が枝　照高院
3 鹿の音を庭に嵐のさそひきて
4 朝まつまくら月にうたひつ(歌力)　左大臣
5 儕装鐘報暁　正五
6 佳会簟含漪　崇伝
7 あかずしも棹さしかへる舟の内　飛鳥井
8 風渡糸楊岸　周洪
9 戯来頡頏燕
10 美哉睍睆鸝　有節
11 谷の戸の曙かすむ春立て　一条院
12 そゝぎすてたる半天の由其　入道前侍従

13 束湿担肩倦　隆尚
14 梳疎老鬢衰　梅印
15 秋風の霜に蓬の打みだれ　照高院
16 もえぬかた分猶ぞあれ之
17 広きのに住は冷しひとつ庵　左大臣
18 依旧月重来　正五
19 山路雲生履　正五
20 狩ばにつるゝ袖のよそほひ（儀カ）　崇伝
21 殺景蹴花鳥　飛鳥井
22 傾春眠草犂　周洪
23 村郊霞幾隔　集雲
24 くれても舟をわたせるや誰　有節
25 かへるさの末は淀のゝ末遠み（道カ）　一条院
26 八幡まつりもやゝ過る比（時）　入道前侍従
27 到処月従我　照高院
28 秋なき里を求んも不知　梅印
29 あはれさもうさも泪の夕まぐれ　左大臣
30 旅万恨千思　崇伝
31 聴角太添瘦　正五
32 陪筵儘促詩　周洪
33 百敷やさぞなめでゝの桜花　飛鳥井
34 官暇惜春移　有節
35 修禊蘭亭友　集雲
36 流の水にうかぶ巵　入道前侍従
37 かはるゞ〳〵うたふも舟のうへにして　左大臣
38 身もうかれめとなれる差〳〵
39 何抛合歓扇
40 待えて露の扉ひらかん（披カ）
41 月影は軒ばの荻にへだゝりて
42 いろにたえゞ〳〵なびく村はぎ（芳宜カ）
43 脱機虫紡績
44 過棧馬羸疲
45 仕歴捫参蜀
46 禍懐亡兆驪
47 咲刀寧邨刃
48 心のおくぞうたがはれぬる（疑カ）
49 後の世の花の台と契りをき
50 さりし仏をたのむ法の師
51 春院蝶前導
52 夜霜蟀潜悲
53 已黄秋草髪
54 以白雨蓉姿
55 晩歩杖馳月
56 かへる木こりの道の嶮さ
57 橋は雪にたゆれば谷を行めぐり
58 いづち嵐の雲ははなるゝ（離カ）
59 ねぐらにとしるきからすの打つれて
60 松深記古祠
61 苔ぢもやとめ入かたにつゞくらん
62 岩の跡先横ばしる喝尼
63 あらいそは見るがうちより引汐に
64 送涼清起颸

梅印
照高院
一乗院
飛鳥井
有節
崇伝
集雲
正五
周洪
入道前侍従
左大臣
正五
集雲
周洪
有節
崇伝
左大臣
一乗院
照高院
梅印
入道前侍従
左大臣
飛鳥井
正五

65 残る日も入相のかねは楼の上　一乗院
66 松はけぶりにもるゝ山涯　照高院
67 驚唱馴僧鶴　有節
68 呈祥知聖麒　梅印
69 うづみ火に灰さしそふる小よ更て
70 老ては常にかゝるやしなひ（顧カ）　入道前侍従
71 心語多嘆旧　入道前侍従（右本之通）
72 運昌此闢基　周洪
73 玉ぼこを麻のかこみものがれはて　左大臣
74 ひくつま琴のしらべ奇き
75 水平舟在陸　正五
76 暖至硯無澌　集雲
77 花夕月金刻　有節
78 ともに霞を汲かはせ唯　左大臣
79 あま人はのどけきまなくやく塩に　入道前侍従
80 なれて苦やの住ゐ卑き　一条院
81 秋の田を遠山寺のあたりにて　左大臣
82 隔林屢聴麋　有節
83 葛のはの垣ほのかたへはへのぼり　照高院
84 感時横路碑　周洪
85 したはるゝゆかりおもひば（ヘカ）涙落
86 うとまるゝ身はなをうき期り　飛鳥井
87 埋恨寸無丈
88 開端統建寅　梅印
89 今いくかありて心の花もみん　一条院
90 春より菊を植ぞ比る

91 嘯月西疇亮　集雲
92 秋ぞかなしむ露は洟る　照高院
93 情霧湿離袖　有節
94 御溝通艶詞　崇伝
95 行水のとゞこほりなき思ひにて　照高院
96 渓扉筧溜滋　集雲
97 稚樵労拾翠　梅印
98 世をしいとなむ心痴さ　一条院
99 あはれにも侘つゝすめるかた田舎　飛鳥井
100 そのほど〳〵に身をぞ嬉む　入道前侍従

御製　十句　有節　九
梅印　八
照高院准后　九　集雲　九
一乗院准后　九　正五　七
左大臣　十　周洪　七
入道前侍従中納言　八　崇伝　七
飛鳥井宰相　七　隆尚　一

《六》

慶長九年九月四日

第六

和漢聯句

1 露かろきはづたひ戦ぐ小篠哉　隆尚
2 園深有鹿馴（ジカ）　秀賢
3 冷扉跫韻　有節

4 秋の田づらもつくるとはなし
5 雁がねは月の行衛に鳴落て
6 干潟はるかにつゞく真砂ぢ
7 江路雪埋断
8 暮村霞更親
9 鶯のやどる笆をさりやらで
10 みぎりの野辺に蝶のとびかふ
11 散花をいづくにさそふ風ならん
12 柳（糸カ）難（繁カ）投春
13 景佳嫌馬疾
14 秋至聴虫呻
15 浅茅生の夕べ露けきかげ淋し
16 客稀伴月新
17 旅もたゞ都おもふになぐさびて
18 ゆるさんかぎり近きさすらへ
19 旧朋無恙否
20 野逸使恩均
21 おちぶれし身もとむばかりはぐゝまれ
22 ゆかりもとめばむつまじき中
23 夙世結縁固
24 うきもつらきもにくからぬ人
25 晤語秋宵短
26 淡妝暁月顰（シワム）
27 梧翻漁一滴
28 道は岩ゐの水結ぶ袖
29 寺は只おくあるかたにふり残り

入道前侍従
飛鳥井
梅印
集雲
一乗院
左大臣
照高院
正五
崇伝
周洪
有節
飛鳥井
入道前侍従
集雲
梅印
左大臣
一乗院
正五
照高院
周洪
集雲
有節
入道前侍従

30 初瀬の山やおく（そ祝カ）さぐらむ
31 近麓霞浮遠
32 詔（紹カ）光雪漸泯
33 摘ばやの野辺の若なもまれにして
34 千種のいろも冬がれの比
35 むしの音の残るも絶し霜ふかし
36 夜闌露仮銀
37 草ふかき月に麻衣打侘て
38 風（声カ）驚夢辰
39 波狂漁尚懶
40 巷陋士方貧
41 飽則一瓢飲
42 盟其双枕姻
43 わかれての三年せの程を待かねて
44 あだにやそむくたらちねの道
45 世慮手翻覆
46 あらこ（うにカ）もあらず心みだるゝ
47 諸ともにくめるなさけの酔の内
48 むかしがたりもしりかはすのみ
49 春幾被花悩
50 藤咲いろも雨にしほるゝ
51 初声は三月のくれのほとゝぎす
52 残夜旅愁頻
53 吹恨思郷笛
54 譬齢下坂輪
55 柴人のはこぶ山ぢに行馴て

飛鳥井
梅印
崇伝
一乗院
左大臣
照高院
有節
梅印
集雲
崇伝
有節
左大臣
一乗院
周洪
飛鳥井
照高院
梅印
入道前侍従
一乗院
周洪
正五
集雲

56 杣木をもまたきりそむるかた　左大臣
57 あたむ(ス脱カ)るかぎりや今年宮作り　前侍従
58 累代現霊神　有節
59 みるが内にあやしきやたゞ夢ならん　照高院
60 渓水月娥淪　崇伝
61 天朗点無霧　正五
62 秋風すさぶむらさめの跡
63 楓飛林失色
64 苔蝕洞亡脣
65 養鶴(場カ)僧閑計　集雲
66 屑故彼浄因　梅印
67 雲横廬匿吹　崇伝
68 所〳〵(余所カ)の瀧のしらいと　有節
69 けそほひも今はおふる(なカ)の乱がみ　周洪
70 とはれぬまゝに閨ぞふりたる　飛鳥井
71 庭の雪様(眺カ)しづかに枕して　左大臣
72 月きよき夜ぞあつさわするゝ　照高院
73 妨静遶檐竹　一乗院
74 花にひる間のねぶりくやしき　梅印
75 無軏輦来蝶　左大臣
76 うつるひかりもあたゝかになる　有節
77 観空栄露槿　入道前侍従
78 寄思恋秋蓴　集雲
79 月一雖千里　正五
80 座同酔十旬　周洪
81 みなたかきくらゐゆるすをよろこびて　有節
82 あふぐ北野はいつのそのかみ　左大臣
83 玉垣に松は木ぶかく立ならび　飛鳥井
84 楊清竹作隣　正五
85 誰歟風扣戸　崇伝
86 学則路知津　梅印
87 海士の子もかづく海辺に打つれて
88 浪にさそはれ浮藻よりくる　照高院
89 をのづから木末かたぶく臥柳　一乗院
90 鷺のみの毛におもき春雨　左大臣
91 吹出る東風やそのまゝつよからじ　入道前侍従
92 満園嫩草匂(ラカ)　集雲
93 陽斜花陣散　有節
94 泉煮茗漚巡　崇伝
95 山住をとひとはるゝもおもふどち　左大臣
96 避(宜カ)九衢塵　雲
97 たく香にはきよむ計の胸の内　照高院
98 こむとつげしに恨はてつゝ　一乗院
99 さゝがにやくるゝ軒端にかゝるらん　周洪
100 青囲幾許筠

御製　十句　有節　十
照高院准后　八　梅印　八
一乗院准后　八　集雲　八
左大臣　十　正五　七
入道前侍従中納言　七　周洪　八
飛鳥井宰相　六　崇伝　七

秀賢　一

《七》

慶長九年九月四日

第七

和漢聯句

1 あひに相て雁金なびく田面哉　照高院
2 江村夕霧晴　有節
3 露行沙易湿　正五
4 夜望月将傾　集雲
5 鐘翳続残夢　周洪
6 かりねながらに明過る宿　入道前中納言
7 いづる間を待し磯辺の艤　左大臣
8 吹とだえたる浪の浦風　飛鳥井
9 かた〴〵に千鳥と渡る声さむみ　一乗院
10 引籠りぬる苦ぶきの内　梅印
11 仙洞嫌苔浅　崇伝
12 雅筵斟竹清　秀賢
13 又難逢丹友　照高院
14 聞人なしとたちし琴のを　有節
15 流涸水何処　正五
16 風浮国（ひか）平　集雲
17 逸民歌美政　周洪
18 進士得論評　入道前中納言
19 心にや其品〴〵の分るらん　左大臣
20 月に花にと送る玉札　飛鳥井
21 春に猶いろこのめるはいかばかり　飛鳥井
22 早妻舟もかすむ遠山　一乗院
23 寄浪もけさはなぎたるしがのうら　梅印
24 老松持節貞　崇伝
25 雪堆窓白尽　有節
26 乚孑道金声　照高院
27 枉れるをいさむるこそは心なれ　集雲
28 麻中蓬寄生　正五
29 櫛風雲乱髪　入道前中納言
30 身を山がつになせるはて〳〵　周洪
31 隠真微不起　飛鳥井
32 よはひの後は例ならぬのみ　左大臣
33 をこなへ（ひか）に仏をもなをとなへ添　一乗院
34 冬ふかきよはさゆる衣手　正五
35 月にふる霜は雪かと置かさね　入道前中納言
36 就荒残菊英　照高院
37 蝶やかつ秋の籬をさりぬらん　梅印
38 いづち吹やる風の夕ぎり　有節
39 卓筆峰孤峻　崇伝
40 凝香社旧盟　左大臣
41 種蓮修浄遠　一乗院
42 もる水にもやわく六のとき　飛鳥井
43 いねがてにあかす網代の床の上　集雲
44 屏風ひろげてしのび入つゝ
45 たのめ置て先立るこそ使なれ
46 雁書慰旅程

47 山遭雲霧縛　有節
48 月にしぐれの名残冷し　一乗院
49 期花頻屈指　周洪
50 遇柳已多情　正五
51 子々繞巣燕　集雲
52 言々宿壠鸚　有節
53 よむ歌も道はあまたの筋有て
54 葉作顕佳名　一乗院
55 いのりこし誠のしるしなからめや　照高院
56 ものゝけもいまいくよひの僧　左大臣
57 待にしも生るゝ程は遠からで　一乗院
58 そのつきゞ〳〵も絶しこの家　入道前侍従
59 ながれ来る末の筧の水の音
60 妨寂厭風軽　周洪
61 瀟洒封候竹　有節
62 たが住なしてかこふ一むら
63 宮野月無隔　正五
64 幻泡露可并
65 藻にすめるわれから世をもみにしめて　有節
66 何にうらみのつもりはてけむ　照高院
67 おもはぬもおもふとしらばおもへ只
68 跋燭至深更　有節
69 談緩無瑕璧　梅印
70 八巻の法にすつることやは　左大臣
71 当午檐禽睡　集雲
72 逢堅陰兔盈　崇伝
73 九重の内さへ秋はあはれにて　照高院
74 嵯峨のゝ月を砌なる秋（いろ）　一乗院
75 説愁虫札々　周洪
76 なみだもふかき枕はなかし
77 花をさへ人の形見の袖にふれ　入道前侍従
78 雖春誤雪桜　正五
79 ふきと吹音もかすまぬ嵐山
80 厭聴警夜鯨　梅印
81 淡灯童倦読　崇伝
82 画錦相誇栄　集雲
83 道を猶たゞすに国はおさまりて　照高院
84 しらぬゑびすをえらむ関の戸　左大臣
85 司晨鶏唱拍　有節
86 したふも月には（わカ）かれぬる袖　飛鳥井
87 織姫のちぎりにうきをたぐへみて　一乗院
88 よもぎが島をおもひやる秋
89 池はあせちりし紅葉は跡もなし　左大臣
90 人稀舟自横　周洪
91 五月雨にながれの水の道こえて　入道前侍従
92 跡やはのべをかけて住かげ　照高院
93 草暗迷帰犢　正五
94 園温来凍鶯　集雲
95 日のうつる空にも春のいろみへて
96 きのふを去年と歳を越けり　一乗院
97 雪あられふりみそゝぎみあさ霞　照高院
98 待遅花洛城　有節

99 橘にやどりかりてよほとゝぎす　左大臣
100 夢覚枕黎明　秀賢

御製　十一句　梅印　五
照高院准后　十　集雲　九
一乗院准后　九　正五　八
左大臣　十　周洪　七
入道侍従中納言　七　崇伝　六
飛鳥井宰相　六　秀賢　二
有節　十

《八》

慶長九年九月五日

第八

和漢聯句

1 暮と明と鳴鹿にわく野山かな　一乗院
2 帯霜草色稠　周洪
3 蘆花汀誤雪　梅印
4 桂月夜登楼　崇伝
5 初雁の過行空のしたはれて　照高院
6 峰をへだつる遠のしら雲　左大臣
7 降晴るゝ名残さむけき夕時雨
8 何村牧笛幽　正五
9 路傍争緑草　有節
10 霞泛斟紅蒭　集雲
11 まじはるゝ遅き日影やわかざらん　入道前中納言
12 胡てふも庭になるゝうぐひす　飛鳥井
13 繰柳糸風手　隆尚
14 雨こまかにもそゝぐ江の水　一乗院
15 靄積蜑燈淡　周洪
16 齢延叡箒脩　梅印
17 粧成丹項鶴　崇伝
18 真砂ぢひろき末の岩がね　照高院
19 塩がまの跡にのこれるたまり水　左大臣
20 つめるほとりにつゞく鴨川
21 一月映花百　正五
22 三春及弁侔　有節
23 温存聞鳥囀　集雲
24 明はなれたる軒のしづけさ　入道前中納言
25 そよぎつる呉竹うづむ雪晴て　飛鳥井
26 寒吟乗興舟　周洪
27 霜ふかき野島が崎のきりぐ〳〵す
28 露溥湿草頭　崇伝
29 月影の色をそへたる真萩はら　一乗院
30 とひよる道も古郷のくれ　大臣
31 難波づはかすみて遠き鐘の声　照高院
32 梅綻暗香浮　梅印
33 八字鶯塗黛　有節
34 団茶鳳煮瓯　正五
35 ねぶれるもかたるがほとはまぎらかし　入道前中納言
36 勉旃継晷油　集雲
37 才高韓配泰　崇伝

38 子をあはれむやいさめなるらん　左大臣
39 物おもふけはひをさらにあやしみて　一乗院
40 しのぶちぎりやつひにもれまし　周洪
41 渡 雨 未 雲 滴　飛鳥井
42 ながき跡をししたふあはれさ　照高院
43 かしこきは筆のちからも常ならで　左大臣
44 絵にもうつすは龍の玉しゐ
45 吹風にたつる纛手はしたがひて
46 雲 晴 月 掛 釣　有節
47 棲 鴉 驚 夜 冷　集雲
48 はやしのかげも露やしるらん（げカ）　入道侍従
49 芝草は咲かとみれば花落て　照高院
50 断 霞 夕 照 収　梅印
51 隣 鐘 春 夢 脆　有節
52 刻 箭 漏 声 通　崇伝
53 おしむにも今宵計を今年にて　左大臣
54 我 涯 老 欲 休　集雲
55 卜 閑 禅 榻 杜　梅印
56 優婆寒（塞カ）となる心ことなる
57 葛城や岸に分入そのむかし
58 雲うづむにや橋は跡なき
59 五月雨に波も岩こそ瀧（すカ）つ川
60 非（兎カ）民 扑 野 賜　一乗院
61 君が代は時をたがへぬめぐみにて　照高院
62 月 隹（佳カ） 催 雅 遊　飛鳥井
63 袖も只もみぢむしろはいろ〳〵に　周洪
入道侍従
正五

64 作 群 林 下 麈　有節
65 山 従 雲 剥 近　崇伝
66 浅間のたけは煙にぞみる　照高院
67 音にのみ聞て来ぬるしなのぢや　左大臣
68 旅にいく度おもふ古里
69 鯉 沈 書 信 断　有節
70 めかるればまたうとく成人　入道侍従
71 へだてある中は蘆もさはりにて　一乗院
72 木丁打かけ風をまつ床　左大臣
73 入 衣 蛍 似 親　集雲
74 近 枕 蟀 如 愁　周洪
75 更て行さがのゝ月は影さびし
76 霧 密 路 無 不　有節
77 鞭 後 尋 花 友　梅印
78 分るに春の山の杳けさ　飛鳥井
79 和 晴 霞 曝 錦　正五
80 蔵 道 雹 飛 楸　集雲
81 ものごとのあそびがたきもなれ〳〵て　左大臣
82 ひいなはこゝにかしこにぞ置
83 むしを屋にえらびいれんの秋近み　入道侍従
84 はしゐにあかぬ袖の涼しさ　一乗院
85 遮 塵 先 植 竹　周洪
86 同 器（貳カ） 更 慙 蕕　崇伝
87 身をしらば心あるべき伴ひに　照高院
88 いや（まカ）〳〵しきも後はなめしき　左大臣
89 ことのはも酔のみだれはまほならで　一乗院

90 浪間に舟のかぢこたへする　飛鳥井
91 月になるかたは塩瀬やしるからん　有節
92 色彰萩動冽　正五
93 遮秋天霧幕　一乗院
94 まだ明はてぬ里のかよひぢ　梅印
95 衰鬢戴星出　照高院
96 つかへなれてぞ代々をかさぬる　左大臣
97 かげさらできよむる花の御垣守　入道侍従
98 若ばの露もあかぬ菊の戸　崇伝
99 霎湿蝶衫却
100 谷牽鶯履留

御製　十一句　梅印　七
照高院准后　九　集雲　八
一乗院准后　九　正五　六
左大臣　十一　周洪　七
入道侍従中納言　八　崇伝　八
飛鳥井宰相　六　隆尚　一
有節　九

《九》

慶長九年九月五日
第九
漢和聯句

1 楓有無香恨　集雲
2 花野のすゑの岡越の途　左大臣
3 小鷹狩かへる袂も霧分て　照高院
4 月にみだるゝ露の玉珠　一乗院
5 度曲風前竹　崇伝
6 窓の外山の雲ぞきえ徂
7 観掛千尋瀑　周洪
8 化覃異城(城カ)陬　梅印
9 再来徳恵燕　正五
10 軒ばつゞきに(とつむら撞カ)　飛鳥井
11 水緑浸花影　有節
12 のどけき池にめぐる觚(サカヅキ)　入道前中納言
13 論詩忘日永　秀賢
14 尋故嘆栖蕪　集雲
15 あさがほのゆかりおもひのかたらひに　左大臣
16 はかなき露の情をぞ盱　照高院
17 なまめける人の俤身にしみて　一乗院
18 行妖嘯月狐　崇伝
19 あやしきや北の空なる星ならし
20 能伝孔道来　周洪
21 学知唯礼歩　梅印
22 避得被名拘　正五
23 しづかにて心もいかに住所　飛鳥井
24 巾車稀旧都　有節
25 漕出る舟かず〳〵のしがの浦　入道前中納言
26 あくるかた田にまづおろす罝(アミ)(帯カ)　左大臣
27 波平萍固　集雲
28 蔭覆桂昌株　梅印

29 懸壁 月 弓 様　周洪
30 ねやも夜さむの枕かたしき(敷カ)　照高院
31 衣うつ杵の響遠からで　一乗院
32 道行袖ぞ霧に濡そふ　崇伝
33 境 自 睫 梢 近　左大臣
34 峰のむかひのはたし(トカカ)舟よぶ(呼カ)　有節
35 山 西 湘 己 暮　正五
36 闕 北 漢 其 図　照高院
37 玉しゐをかへす煙ははかなしや　崇伝
38 若 人 蝮 首 妹(株カ)
39 よそほひもますみのかゞみ向ひなれ
40 山は雲間にちかき湖
41 月を猶三井の古寺よしありて　飛鳥井
42 秋のさびしさとひくやと需(モトム)　左大臣
43 岩 戸 霧 関 鎖
44 木高き松に蔦ぞ紆へる　周洪
45 仙 路 鶴 先 進　入道前中納言
46 駅(歟カ) 程 馬 疾 趨　正五
47 行 人 勝 餞　集雲
48 雪にぞあくる宇治の山逾(ゴエ)
49 はかなきは花に音する小よ嵐　一乗院
50 匂ひもともに散や梅つぼ(蕾カ)　左大臣
51 帰るさの袖はぬれたる春の雨　入道前中納言
52 薪に入し嶺は嶇しな　照高院
53 翼 如 鞋 彳 亍　有節
54 夢 耳 枕 須 臾　周洪
55 おほけなき人の茵をかりぶしに　左大臣
56 しるきよそめの関や逋るゝ　一乗院
57 鮎はしる簗はいく瀬の末ならし
58 岸 辺 択 処 鸕　集雲
59 一かたは往来たへたる小田の原　飛鳥井
60 野 生 交 易 渝　崇伝
61 陰 晴 翻 手 月　梅印
62 風にかしはのちれる珠〳〵
63 暫 栄 溥 露 淡　正五
64 国のつかさもあへばあふ辜　左大臣
65 愁 幾 懐 沙 屈　正五
66 去　泛(サカ) 海 蘇　崇伝
67 まだきよりおき出て行馬の上
68 路 雪 模 糊(盈カ)　有節
69 つれ〴〵はとひよるもなき柴の庵　一乗院
70 松に嵐のかけさむき(ゼカ)晡(トキ)　照高院
71 腰 斧 帰 樵 閑　正五
72 携 筇 衰 老 扶　周洪
73 けふの賀にいはふこそ只年ならめ　入道前中納言
74 酒 促 盛 筵 斟　梅印
75 有 恋 宿 花 蝶　崇伝
76 園生になれて百千鳥呱(キウ)
77 日の影も猶あたゝかに成まさり　左大臣
78 春 天 月 色 殊　有節
79 あはれさや霞にうかぶ淡ぢ島　飛鳥井
80 就 眠 寄 母 鳧　集雲

81 うき草も茂る流れの岩ね水　左大臣
82 早苗なりしも今や初稲　有節
83 招友 開 秋 社　正五
84 餘 奸(姦カ) 有 月 孤　照高院
85 ならべつる夜半の枕を立はかれ(わカ)
86 なげのなさけもえにしならずや(平)　崇伝
87 頻 拭 長 流 渡　周洪
88 粧 成 濃 抹 膚　左大臣
89 出湯にやゆずりのかずをかさぬらん
90 やまふにかゝる名残痛まし　一乗院
91 つかへたゞ里がはなるはおこたりて(ちカ)　有節
92 草 繁 埋 九 衢　集雲
93 旱 災 民 止 市
94 いづくのかたにとぶむら烏
95 出入もたえぬ衡門(衡カ)は花の本　照高院
96 梅 雖 和 暖 癯　崇伝
97 金 衣 春 必 表　梅印
98 宵 燭 暁 皆 枯　有節
99 呉竹のよゝたちになる風立て　左大臣
100 川辺のなみになをみだれ蘆　飛鳥井

御製　十一　梅印　六
照高院准后　九　有節　十
一乗院准后　九　集雲　八
入道前侍従中納言　六　正五　七
左大臣　十二　周洪　七

飛鳥井宰相　六　崇伝　八
秀賢　一

《一〇》

慶長九年九月五日

第十

和漢聯句

1 ことぶきの星かも菊を雲の上　入道前侍従中納言
2 逐 秋 蝶 過 垣　崇伝
3 虫 機 催 野 外　周洪
4 さそはれて行袖の月影　飛鳥井宰相
5 更 呼 漁 艤 艇 集雲
6 幾 興 聖 盈 樽 有節
7 釣簾巻ば雪の山〳〵あらはれて　一乗院
8 杉のみたかき木枯のあと　照高院
9 真柴にも森の下草かりつかね　左大臣
10 駒行つるゝ道のかへるさ
11 暮 行 笻 与 進　正五
12 昼 寝 枕 締 婚　梅印
13 約 欲 共 遐 歳　秀賢
14 野辺の小まつを植そふる宿　入道前侍従
15 塵 避 市 中 隠　崇伝
16 月 生 天 山 暮　周洪
17 雲霧もいかに晴行鷲のみね　飛鳥井
18 嵐 冷 刹 揺 幡　集雲
19 擇 処 先 飛 錫　有節

20 心はとをきさかひにもすむ　一乗院
21 花あれば野山を常の家ゐにて　照高院
22 かすむ籬ぞめぐりとはなる　左大臣
23 とび行はねたる小てふもみだれ相
24 携友弄春温　正五
25 貴瘦随身笠　梅印
26 品声難第塤
27 つど(たカ)ふるに聞後たる道やことならじ
28 其国〳〵も筆のうつし絵　入道
29 岑晴楼聚景　飛鳥井
30 のこるもみぢの枝のしら雪　周洪
31 鷺はたゞ松あるかたに打つれて　照高院
32 夕は月も住吉のはま　左大臣
33 風烈霧無跡
34 秋臻園断魂　集雲
35 待人の文のかへしもあだにして　梅印
36 如雨涙頻煩　一乗院
37 帰思被鵑促　有節
38 古郷いかに匂ふたちばな　崇伝
39 五月雨はいたまもりそふ露置て　入道中納言
40 流水後其源　照高院
41 塘つく池や小田にも遠からじ　有節
42 一声笛孰村　左大臣
43 鳩(鳴カ)咲はすむ山かげのあたりにて　周洪
44 奥ある林霧こめてけり
45 歩月行何倦　一乗院
46 佐野のわたりのくるゝ遠近　梅印
47 見ればたゞ雨になりたる三輪が崎　飛鳥井
48 急風雲葉翻　正五
49 春従花尽夢　集雲
50 朝夕かすみくむ袖もいさ　照高院
51 こほりにしあか井はさらにとけやらで
52 さゞれ石まに冱る履をと　左大臣
53 衣薄労霜厚　有節
54 まばら也けり篠吹の風　飛鳥井
55 かり初に出し世ながら住つきて　照高院
56 卜閑厭故(磐カ)磐　集雲
57 うき名のみつらねて向ふ影の前　一乗院
58 祭則耐羞蘋　崇伝
59 智磨非台鏡　周洪
60 あふげば空の月のさやけさ　照高院
61 何先兄弟雁　正五
62 霧吹をくる秋風の末　入道中納言
63 あやしきをみてはさとしと驚きて　左大臣
64 虹は日かげを立ぞつらぬく
65 戦兢橋独木　有節
66 真俗地同根　周洪
67 とく法の場には袖のまじはりて
68 喝電激雷奔　梅印
69 境勝換窓眼　正五
70 雪の尾上は花となりけり　左大臣
71 高円や霞も雪もきへつくし　入道前中納言

72 春風さそふむさゝびの声　飛鳥井
73 暁の夢は覚ぬる枕して　崇伝
74 致爽月臨軒　照高院
75 あつさ今のこらぬ端のあかなくに　一乗院
76 秋のほたるも袖ちかきくれ　集雲
77 巻依勤業瓣（弁カ）　左大臣
78 まだきよはひに桂おらばや
79 梓弓いかにと人をこゝろみて
80 妾願合歓鴛　正五
81 けさまでも夜るの衾を床の上　一乗院
82 さむさをふせぐ屏風しるしも　照高院
83 たえたるも結ぶほどある夢にして　左大臣
84 淡涯蟪僅存　集雲
85 遊糸春苦短
86 宝暦節開元　周洪
87 東吹梅揺帽　梅印
88 南隣花挿轅　崇伝
89 おもふどち鶯のねにいざなはれ　有節
90 木菟したひとり〳〵になく　照高院
91 物すき月（一脱カ）は更行谷のくれ
92 樹神となるや秋の川音
93 よぶかたも霧にはかれぬ（わカ）はたし舟　一乗院
94 蘆戦鷺驚鷲　左大臣
95 戒さへはやぶさ近くかけり落　入道前中納言
96 みぞれふりにし跡のむらくも　崇伝
97 杉のはにかくる入日はなゝめにて　左大臣
98 鐘声報寺喧　飛鳥井
99 舞乎呈象笑　照高院
100 微兮賜除恩　集雲
　　梅印
　　有節

御製　十一句　有節　八
照高院准后　十一　梅印　七
一乗院准后　八　集雲　八
左大臣　十一　正五　七
入道前侍従中納言　七　周洪　七
飛鳥井宰相　七　崇伝　八
秀賢　一

［校異］〈第三〉3さむ—さむき、5あへす—あへぬ、29つゝく—つゝく（ツヽク）、33すむ—すむ心、38きへけり—晴けり、39冬木—草木、48憎—増、53浪—波、70かふ—けふ、73象—家、78江の水—湊江、88せのね—虫の音、93そゆる—そよる、95末—方、97かほりを—かほり　〈第七〉2夕—積、7いつる間を—塩時を、13丹—好　〈第十〉1星にも—星かも、4さそはれて行袖の月影—行袖さそふ月の夕かけ、5漁—溢、8杉—松、16暮—尊

［付記］本稿は平成二十二年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）を使用した（楊）。

（よう　こんほう・日本学術振興会外国人特別研究員）
（なかむら　たけし・本学非常勤講師）